

# 幼児教育とは何か

## 幼稚園の意義を考える



関 口 は つ え

はじめに

最近子どもの発達加速現象が注目され、小学校の教育内容が一段とむずかしく改訂され、中教審答申にみられるように幼児教育制度の改革が云々されている。しかし一方、昭和四十四年の保育学会による幼児の精神発達の研究において、十五年前の幼児に比べて、社会性においてははかかなり発達が遅れていること、また知的な発達においてすらも、「自分の年をいう」「両手の指の数を覚えている」「住所をいう」<sup>(注1)</sup>など、生活に即して育つとみられる領域での遅れが指摘され、また、近ごろの家庭におけるしつけの乱れが目立ち、親のあり方についての多くの疑問が出されている。このような時に当たって、幼稚園における読み書きの指導をどうするかというような議論の前に、社会全体が

幼児に対する対し方をもっと真剣に考えなければならぬと痛感する。

現代の能力中心主義から、幼児の教育を発達の促進や能力の開発に重点をおく傾向が強いように思われるが、教育は個人の開発と同時に、社会の発展に即するような型づけも行なわれるべきものである。それにもかかわらず、社会化の基盤となるべき家庭教育の方針がゆらぎ、しつけのわくがゆるやかになることに比例して、集団保育の場におけるしつけや学習への期待が大きくなっているのが実情である。

たしかに、変化がはげしく、五十年後の世界を予測することの困難なこの世相の中で、幼い子どもを教育することはたやすいことではない。今の幼児がおとなになるころのために、何をしてやるのが一番よいのか、根気強く教え、大切に育てたも

のが本當に役立つようになるのか、信ずることがむずかしい。悪化する生活環境の中で、個人ではどうすることもできない無力感にさえおそわれるのである。そこから親は子どもに未来を託して、忍耐強く子どもをほぐくむ氣力を失い、自己自身の満足や直接的な効果の現われることに氣をとられやすくなり、一方、母親自身も社会的な存在として、社会的な役割をになうことが多くなることから、家族の關係が情緒的に密度の高いものから、合理的ではあるけれども機械的な、平面的な結合に変わってくるという傾向もみられる。

以上のような問題と共に、かたよった児童中心主義の考えが、子どもの知的な能力、意欲や自発性だけを重要視して、人格的、情緒的な陶冶を無視する傾向を生み、集団保育の場（幼稚園、保育所）の普及にともなうて、幼児の教育を社会の責任に転嫁しようとする風潮が強い。そのような中であつて、今必要なことは、幼児期の意義、発達の特徴、生活状況をよくとらえて、子どものために用意しなければならないこと、子どもに教え、方向づけなければならないこと、統制しなければならないこと、そして任せるべきことは何かを検討して、家庭と集団保育の場とがそれをどのように分担するかを明確化することであろう。

### なぜ幼稚園が必要か

従来幼い子どもを養い育て、人間として必要なことを教え、その成長をはかることは家庭が行なってきた。それを幼稚園に入れて、特定の時間だけ集団で教育しようとするのはそれなりの意義を認めるからに他ならないのであるが、それをどこに認めたらよいのであろうか。村山氏は保育効果が認められるものとして、音感、リズム感、器用さ、運動神経、知能、社会性、遊びの技術、生活習慣、性格、創作力などを挙げておられるが、これらの中には真に幼稚園という幼児同志の集団、教師という第三者との出会いの特殊性がいかにされて効果を生んだものとしてよりも、むしろ家庭では経験させにくいことが、幼稚園では経験させやすいことにもとづく効果がとり上げられているように思われる。

たしかに幼稚園の機能の一つは歌唱、リズム、描画、体育的な指導など、家庭ではできにくいことが教えられるという利点がある。しかし最近のように「〇〇教室」が流行してくると必ずしも幼稚園だけのものといえなくなる。第二点は知的な発達をはかるために、さまざまな課題を与え、教授、訓練することがあげられるが、これは幼児期の特殊性、個人差、また教える内容の程度からして、むしろ家庭のように個別指導の可能な場所の方が適確に行なわれるのではないだろうか。第三にしつけの効果であるが、教師という權威にもとづいて、または集団圧

力という外力によって形成される生活習慣であると、行動の容はもたらすことはできようが、そのしつけの効果自体が幼児の人間としての内的成長にどれだけ寄与するかを考えると問題がある。

それでは幼児が集まって教師の指導のもとに活動することの本来の意味はどこにあるのだろうか。私は次の点にその本質を認めたいと考える。

第一に、幼稚園は幼児が親や家庭から離れて、一個の独立した存在として自由にふるまい、自己の世界をくりひろげる場であること。幼稚園は今まで保護され、支配されていた家庭から離れて、一定の時間全く別の社会集団の一員として行動する場面である。そこで大切なことは、親という監督者から教師という監督者にひきわたされるのではなく、幼稚園は家庭とは異なる機能をもつ社会として子どもを迎えなければならないことである。

第二に、幼稚園は家庭とは異なる社会規範をもつところの生活共同体であることである。そこでは幼児ひとりひとりが、今まで家庭で培われて来た社会性、個性を、新しい生活場面に適応させ、必要に応じて変容させたり、新しいものを加えたりしていくところである。ゆえに幼稚園という集団自体が民主的で、建設的、創造的な規範や構造をもたなければならないのである。

第三に、先にあげられたような諸種の効果を個人に生むようなきさまざまな活動を展開する場であるわけであるが、それは幼児自身のことになっているもの（欲求、興味、習慣など）と、幼稚園の物的、環境的状况と教師の方向づけとの出会いの中で展開するものであって、単に教師の意図のみで行なわれるものではないこと。

第四に、幼稚園は単に能力を養うのみでなく、遊び活動を通して幼児に育った諸能力や可能性が実際に生かされ、活用される場であること。保育はその効果を生むためにのみ行なうのではなく、同時に生活そのもの、すなわち過程でもあるのである。ゆえに教師における、人間としてのよりよいあり方への価値志向にもとづく、望ましい社会活動の展開がなされるべき場であることである。

### (1) 幼稚園は幼児の公的な世界である

家庭は子どもに種族としての、および文化や社会の伝統を教え、人間として必要な基本的な特性をはぐくんでいる。そこでは子どもは多かれ少なかれ親の個人的影響を受け、個々の素質とあいまって独自の精神を形成していく。親は基本的に、子どもをどのような人間に育てるかのすべての権利と責任をになつており、それが親であることの意味でもあろう。教師や第三者

は親に忠告することはできても、親にそのやり方を変えさせる権利はない。しかし、一度幼児が幼稚園の一員になった時には、園内での行動は幼児自身の意志、教師の方向づけ、集団関係にもとづいて、自由に行なうことができる。幼児が家庭とは違った場面や仕方を選択し、遂行し、評価する活動を通して、一段と人格のわくを拡張、新たな側面を加えることができるのである。

入園後一カ月のころ、始めての保育参観に訪れた母親に自分のロッカーやいすを教え、園内のいろいろな場所に案内している幼児の姿の中に、親に支配されない独自の世界をもった成長への誇りがみられる。教師や仲間という伴侶と共に形成して行く新しい生活への期待を大切に育てなければならないのである。そこでは教師は幼児の支持者や調整者ではあっても支配者であってはならないと思う。ひとりひとりの幼児に人間としての尊厳を育てることが第一の役割であろう。すなわち、家庭で形成された能力や特性が幼稚園という集団の場で生かされる体験を通して、家庭というプライベートな生活の意味を生かし、自信を育てることができるのである。

個人的な体験であるが、かつて幼稚園で居残り保育を受けることを余儀なくされた私の長男は、徐々に午前中の活動で意欲を失い、集団への積極的参加がみられなかった。その後、午後

の帰宅が許され、家庭という自分の城で活動のエネルギーをたくわえる時間をもつことによって、安定した活動をとり戻するという事実にふれ、これらのことの意義を深く感ずるものである。

## (2) 幼稚園の集団が幼児を規定する

幼児の発達には生活の展開を通してなされるものであるから、集団が個人に何を奨励し、何を制限するかの規範やふんい気が、幼児の集団へのかかわり方を通して幼児のあり方を規定していく。クラスの人数、物的状況、リーダーとしての教師の動き方等によって思わぬ集団効果を生むことがあるのである。その中で望ましい集団状況を維持するために必要な規範のもとに活動させ、社会的な存在として個人に必要な姿勢を形成することがなされなければならない。

それは、個人の欲求や興味を尊重しながらも、他者や集団全体との関係で生ずる葛藤や自分の限界を体験することによって、自己のあり方をふり返らせ、周囲と自己を調和させていくことである。集団内での生活が個人の発展と共に、集団の発展ももたらすものであるという洞察にもとづいた集団指導に導かれて、個人の努力や能力が集団の中で十分に生かされること、集団の意志で目的を達成することなどが体験され、それらを通して、

生活を自分たちの手で形成しようとする積極的な態度が作られることを期待したい。

それには、幼稚園のように一年ないし二年、三年と同じ集団で生活しながら芽生える、心理的結合関係に支えられるような集団の場であることが必要なのである。

### (3) 幼児の教育は出会いの中で行なわれる

幼児が何を行なうかを決定するのは、幼児自身の欲求や興味、意図か、物的、集団的刺激の誘発によるか、あるいは教師の考えのいずれか、またはそれらの出会いの中できまる。

幼稚園の教育は、単に幼児に活動の場を与えて自由に活動させることによって、自然な発達を上げさせることでもないし、文化に規定された学習活動による知識や技能の増進をはかるだけでもない。多かれ少なかれどちらかにかたよるのが現状であるけれども、実はその両者の上立った第三の活動の展開が最も重要なものである。すなわち、幼児の意図をよりよい形で実現させようとする教師の働きかけを受けて、幼児の活動は一層充実し、進歩するものであるし、教師から受けた訓練による知識や技能の獲得の結果を、自分の欲求や目的に合わせて活用していくことを通して、与えられたものが真に幼児のものとして内面化するものと考えられる。

それらは、いわゆる遊びの活動の形をとるものであるけれども、幼児が運動感覚的満足や心理的欲求充足をはかるための個人的な遊びから、物に即して展開する遊び、自己の意図で物を変えながらする遊び、共同の目的をもった遊びなど、遊びのいろいろな段階においてこそ、教師の意図的な操作と技能的、知識的指導が加えられなければならない。単なる教授活動による教育は、幼児の能力を育てることはできても、それをいかなる行為につなげるか、自己にとっても、社会にとっても好ましい活用の仕方を子どもに教えることはできない。教師においてのみでなく、子どもにとっても意味のある活動を充分に行なうことを通して、内的一貫性をもった生活体を形成することが可能になるのではないだろうか。

### (4) 教育は教師によつてきまる

教育とは本来教育する者とされる者との相互作用であり、教育活動における教師の役割は重大であると同時にきわめて多様である。

幼児の教育に当たっては、まず第一に幼児の欲求充足者として、個別的な幼児の欲求を満たし、どの子どもも満足し、安定して活動ができるようにすること、第二には幼児の活動を促したり、発展させたりするような物的状況を整えたり、働きかけ

をする役割、具体的には教材を整え、場面設定を行ない、活動状態の変化に応じて次々と操作する仕事である。第三には活動に向つづけや意味を与え、かつ認識を育てる役割である。それは幼児が気づかない大事なこと、よいこと、正しいことなどを気づかせたり、教えたり、強化を与えたりして望ましい人間に意向的に方向づけるところの、教育活動における中心的役割である。そこでは、教師ひとりひとりの人間観や世界観の発露があり、そこから後からくる者を自己の信ずることに向けて導こうという教育的行為の大切な部分がある。

現代のように、価値が混乱し、多様化している時代にあつては、何を基盤にして幼児に働きかけるかについての統一の原理を求めることが困難であるだけに、各々の教師の任務が大きい。個人の価値の追求が自由になされている時代であるので、共存する人間同志の真の福祉を旨とせず、次元の高い姿勢が教師に要求されるのである。

また、このことは幼児がひとりの教師にだけでなく、複数の教師に受容されたり、教師集団として多様な作用を受けることなどを通して、教師の個人的特性から生ずる限界をこえて、一層好ましい影響を受けるように配慮されるべきであろう。それは一対一の私的な師弟関係から多対一、多対多の関係に拡げて、社会的存在としてのあり方の意義を高めることから大切であ

る。したがって、幼稚園では、一人の教師のもとに一クラスがまとまった活動を展開すると共に、いろいろなクラス、いろいろな教師が出会って活動を展開する場面もまた用意されなければならない。

知らないうちに教育の軌道に乗せられ、一生懸命学習し、実践して来たことが、結局は人間社会を滅ぼす方向に向かつていた、というような結果にならないために、われわれは幼児の教育に慎重でなければならないと思う。

幼児が次の世代をになうために必要だと考えられる能力や技術を教え、社会の進歩にとり残されないようにしなければならぬと考える前に、人間存在として、他の人間や、自然物やさまざまな人工物などの関係と自己の位置を自覚し、その中で真の意味での自己の存在を主張することができるような、旨ざめた個人の確立を旨ざりたいと考えるものである。

(郡山女子大学)

(注1) 日本保育学会著「日本の幼児の精神発達」フレールベル館 昭和45年

(注2) 村山貞雄著「保育効果の研究」フレールベル館 昭和